

1月17日～3月24日六本木の森アートセンターギャラリーで開催の「新・北斎展」を観た。数年前、上野での北斎展に土曜日に出かけ行列の長さにより仰天して引き返したことがある。今回は「20～40分の待ち時間あり」との事前情報を見て金曜日午後に出かけた。実際の待ち時間は10分少々だったが、来場者の多さは北斎の高い人気を裏付けるほどだ。

僕の北斎好きは中学1年頃に始まる。今は作家になっている村松友視君とは大親友だったが、妙なライバル意識があり、古本屋で珍しい本を先に見つけて「どうだ、いいだろう」と見せ合うこともあった。そんな中で彼が見つけた和とじ木版の「北斎漫画」1冊は羨ましかった。北斎の「東海道五十三次」も村松君に先を越された。これも和とじと彼も僕も記憶していたが、60歳を過ぎてから村松宅を訪問した時、「これ現代的な印刷の本だったよ」と見せられた。広重の抒情的な名所絵として優れた「東海道五十三次」に比べ、人物が大きく描かれた北斎のものは「面白い」と、中学生時代の村松君と僕の意見が一致した。フトボシという渾名の級友が、北斎描く庶民の男の正面に顔が似ているので、二人で「北斎」と新しい渾名をつけたことがある。

古い話はこれまで。さて、「新・北斎展」の「新」は英語で **updated** とされている。これまで日本で公開されたことのない作品の展示がある、との意味らしい。本展の監修者、故永田生慈氏のコレクションから初公開されるもの、海外から初来日したものなどである。出展品にはおなじみの傑作もあり、各種の作品を「画号」変遷順に網羅している。

### 1) 勝川派の絵師としての春朗時代(20～35歳頃)

役者絵(Fig 1)、西洋絵画の透視法を使った浮絵(Fig 2)、庶民の子供が遊ぶ絵、狂言の絵が多い。すでに後年の活躍を予告するような嚆本の精緻な挿絵も始めている。初公開のものでは「鎌倉景勝図鑑」という墨筆の巻物が、遊歩順に江の島辺りの景色を描いており、近くに住む僕は個人的に興味を持った。



Fig 1: 四代目岩井半四郎 かしく  
勝川派より鳥居派的との指摘あり。



Fig 2: 新板浮絵両国番夕涼花火見物之図  
40年後にも同じ版木が磨滅せずに摺られていた

## 2) 勝川派を離れ肉筆画、狂歌絵本の挿絵の分野に取り組んだ宗理期(36~46 歳頃)

北斎には珍しい大首絵(大判人物画)は Fig 3+ 4 の 2 点だけ。「風流無くてななくせ」だから 7 枚あった可能性はある。Fig 5 は傑作として有名な肉筆画で、淡筆だ。本展の呼び物の一つ、永田コレクションの「津和野藩伝来摺物」のうち Fig6 は、館内のビデオで永田氏が「保管状態がよく色鮮やか」と紹介、是非観たかったが、後期展示で、前期展示を訪れた僕は残念ながら観られなかった。

Fig 7 は、エッチング技法を理解した上で真似ているきわめて小さい木版画で、北斎にこれほど西洋風のものがあるとは知らなかった。



Fig 3 遠眼鏡



Fig 4 ほうずき



Fig 5 夜鷹図



Fig 6 吉野山花見

貴人は典雅だが従者の顔は典型的に北斎的な庶民鼻

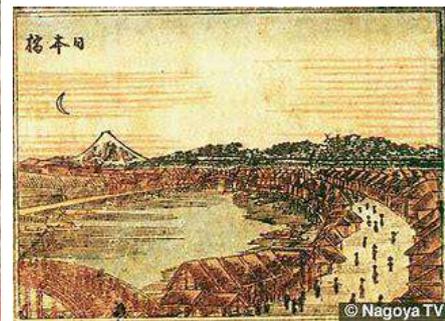


Fig7 阿蘭陀画鏡江戸八景 日本橋

## 3) 絵本の挿絵に傾注した葛飾北斎期(46~50 歳頃)

滑稽な鳥羽絵集が気に入った。Fig 8 はその中の一つ。絵本ではシンシナティ美術館から里帰りの「かな手本忠臣蔵」が今回の売りの一つだが、変色したのか、鮮明に見えなかった。シンシナティ美術館からの里帰りでは、絹本肉筆の美人図 (Fig 9) で艶やかで美しい。曲亭馬琴とタグを組んだ、「新編新水滸画伝」と「椿説弓張月」(Fig 10) は現代の劇画の先駆といえる。この種の読本の展示がきわめて多く、北

斎の多作に驚いたが、全部ゆっくり見る時間がない。Fig8,9,10を並べてみると、北斎の画風の多彩さが分かる。



Fig 8 お稽古

Fig 9 円窓の美人図

Fig 10 椿説弓張月

#### 4) 多彩な絵手本を手掛けた戴斗(たいと)期(51~60 歳頃)

「東海道名所一覧」なる鳥瞰図(Fig 11)は、模範となった鋏形蕙斎(くわがたけいさい)の「日本名所の絵」の地理的整合性より北斎自身の造形論理に従っている。「生首図」は西洋画風の質量感があり印象に残ったが気持ちが悪いため、ここには図示しない。「己痴羣夢多字画尽(おのがばかむらむだじえづくし)」は文字絵(絵の輪郭に文字を使っている)の大集成。Fig 12はその一部。「北斎漫画」は絵手本だが、1814~1878年まで第一編から十五編まで出版。Fig. 13はその一部。前述の村松君が古本屋で見つけたものは江戸時代のものであったと思うが、明治時代のものかも。欧州に送られた品物のパッキングに使われた「北斎漫画」がジャポニスムの発端となったことはよく知られている。



Fig 11 東海道名所一覧

Fig 12 文字絵

Fig 13 北斎漫画

#### 5) 錦絵の揃物を多く制作した為一期(61~74 歳)

有名な富嶽三十六景の全四十六景から十三景の展示があったが、世に語り尽くされているので感想は控える。「諸国瀧廻り」では有名なアメーバが分岐するような「下野黒髪山きりふりの瀧」は後期展示で見られず、直線的な瀧の「養老の瀧」(Fig 14)を観た。プルシャン・ブルー(ベロ藍)が美しい。「牡丹に蝶」(Fig 15)では、牡丹のヴォリュームがよいし、花卉と葉の色を裏表で変化させて模様を作っている。逆さの蝶はアクロバットというより、風の突然さと強さを表し、右上から左下への濃い色の方向性で、右下から左上への薄い色の方向性との対比に役立っている。お化けの「百物語」から

3点の展示があり、「こはだ小平二」(Fig 15)は黒と緑を分断する朱の3色の配列が絶妙。北斎の怪奇趣味の頂点といわれるが、恐ろしくも情けないような髑髏は滑稽でもある。「工芸職人用下絵集」は金具工芸品デザインのデッサン集でバライティに富むが、ここでの紹介は割愛する。



Fig 14 養老の瀧

Fig 15 牡丹に蝶

Fig 16 こはだ小平二

#### 6) 自由な発想と表現による肉筆画に専念した画狂老人卅期(75~90歳頃)

「肉筆画帖」は動物、鳥、魚などをリアルに描写したものだが、展示された Fig17 は西洋風写実感がある。シンシナティ美術館からの里帰り「向日葵図」(Fig 18) は珍しい題材の肉筆画で、葉のクマが洋風。今回最大の呼び物の一つは、85歳制作の「雲龍図」(Fig 19)と「雨中の虎図」(Fig 19)。後者は日本にあり、永田氏が前者をパリ・ギメ美術館で見て、これらが本来ペアであったことをつきとめたもの。もう一つの呼び物は、何と90歳制作で、本展で一番大きな(寺院の壁に掛けるもの)「弘法大師修法図」(Fig 20)。



Fig 17

迫力とエネルギーにはびっくり仰天。75歳のときには「80歳になれば画技が進み、90歳になれば本当の意味も分かり、100歳になれば妙技ともなり、110歳では一筆ごとが生きているようにもなるであろう」という意味の事を書いている。立派！！



Fig 18

Fog19

Fig19

Fig 20

以上